

重要有形民俗文化財

阿仁マタギの狩猟用具

国指定までの経緯

- 昭和34年1月7日 「阿仁マタギ用具」126点が、県文化財に指定
- 平成17～19年度 秋田県教育委員会が「阿仁マタギ用具文化財収録作成事業調査」を実施
- 平成24年3月23日 「阿仁マタギ用具」142点を県有形民俗文化財追加指定
※県文化財指定268点
- 平成25年1月18日 国文化財審議会文化財分科会「阿仁マタギの狩猟用具」
293点の指定を答申

阿仁マタギ

現在、マタギは狩猟民を意味する言葉として広く使われがちですが、田口洋美は「福島・新潟・長野などでは一般にヤマビトと称することが多く、マタギといえば秋田の狩人を指したという」と述べています。（『日本民俗大辞典』より）

秋田マタギは集団で熊などの大型獣を獲り、独特の儀式や信仰に基づいた規律正しい狩りを行う。また、秋田県のマタギ集落は白神山地周辺、仙北地方、鳥海山周辺にもあったほか、太平山周辺地域にも散在していたと伝えられています。

中でも阿仁地域は、秋田マタギの中でも専門の狩猟民の多かった所として昔から認識されています。山間の限られた土地に居住していたことから、他地域へ新しく集落を作ったり、狩猟を行ったりしていました。また、獲物を用いて作った薬を遠方に売りに行っていたことも阿仁マタギの特徴であります。このように、集落内に専門の狩猟民が多く住み、居住地にとどまらず、幅広い地域で活躍していたことが、阿仁マタギの特徴であるといえます。

資料収集の経緯

マタギ用具収集のきっかけは、昭和33（1958）年、奈良環之助氏（当時秋田県文化財保護審議委員）による阿仁地方でのマタギ用具調査です。奈良氏は「今にしてマタギのならわしを記録し用具を保存しなければもう後形もなくなるであろう。マタギのならわしに関する詳記は後程にすることとして、まず用具の保存をしたいものだと思う」（秋田県教育委員会蔵指定関連資料より）と考え、各集落に残るマタギ用具の調査を行いました。

この時確認された用具は、

笠（アマブタ）、雑囊（クラゲ）、はらかけ（ハラカケ）、皮手袋（テクリケアシ）、手甲（テウエ）、着物（カッポ）、袴（ハカマ）、股引（モモヒキ）、毛足袋（アブケグルミ）、皮足袋（アブケグルミ）、脛巾（ハバキ）、ゴス（かんじき）、金の爪あるかんじき（タカツメ、鉦様刃物（ナガサ）、火縄銃（シルベ）、弾帯（バンド）、鎗（タテ）、犬の皮（ヒダノソッカ）、またぎべら大（オホナギ）、またぎべら小（コナギ）、麻縄（シナリ）、小刀（マキリ）、巻物 六巻[*資料名は原文のまま]の33点であり、この後「火縄銃に対する小物（注 弾帯など）及びワラ製のはきもの（注 藁沓など）」などを加えた合計126点を昭和34年、秋田県有形民俗文化財に指定しました。

その後50年あまり経って、マタギ習俗をめぐる環境が大きく変化したこと、マタギの信仰や生活面について再調査を行う必要が指摘され、平成17年度から3年間にわたり、秋田県教育委員会は、北秋田市阿仁地域の根子、打当、比立内の3集落に残るマタギ用具の所在調査と使用方法の聞き取り調査を実施しました。

この調査によって、獲物により異なる狩猟道具、薬の製造や販売に関する道具、山の神への信仰を示すものが新たに収集され、これらを加え平成23年度に阿仁マタギ用具合計269点として追加指定されました。

これらの資料によって、さまざまなマタギの狩猟法やその歴史、狩猟生活の環境などもうかがい知ることができ、阿仁地域のマタギ習俗を理解する上で欠くことのできない重要な資料といえます。

マタギ習俗の保護

昭和10年代から既に、マタギ習俗は急速に衰え、集落での生活は農業や林業に依存するようになったことが指摘されてきました。現在では生業としてのマタギは衰退しつつあるものの、観光という面から新たなマタギ像が見直されてきています。近年では、動植物の乱獲や自然破壊などといった問題に対し、マタギの狩猟方法や生活から自然との共生を学ぶことも積極的にすすめられています。今まではマタギの独特な狩猟方法、また山詞などの特殊な儀式に目を向けられがちでしたが、現在はマタギを生み育んできた環境全体を捉える、多分野からの研究もすすみつつあります。

急速に失われていくマタギ習俗を保護しようという動きとして、鉄道や国道が整備されたことも伴い、昭和57年に阿仁町打当に「ふるさとセンター」が開設されました。そこにはマタギ資料を展示する資料館も併設され、阿仁地域は「マタギの里」として注目されるようになり、この時期に前後して、阿仁地域のマタギの生き方を題材とした「マタギ」、「イタズ」といった映画も公開されるなどマタギ習俗が注目されはじめました。

また、平成2（1990）年には、打当に熊牧場が開設され、今まで狩猟の対象であった熊の保護という新たな観点から、地域づくりを行う動きもみられるようになりました。